

ベビーの 英語耳を育む A.R.I.S.メソッド

人間の成長過程において、「ことば」の発達がもっとも著しい時期は生後5年間で、人間の脳の構造は6歳までに90%は完成すると言われています。脳の発育とことばの習得は、ほぼ同時にすんでいくのです。特に1、2歳の幼児の聴覚は、大人には想像もできないくらい鋭いものです。たくさんの聞くもの、見るものに触れ、常に自分以外の人間の話す声や言語と接触を持つことは、赤ちゃんのことばの成長力に弾みをつけ、その能力を最大限に引き出すことに効果的です。

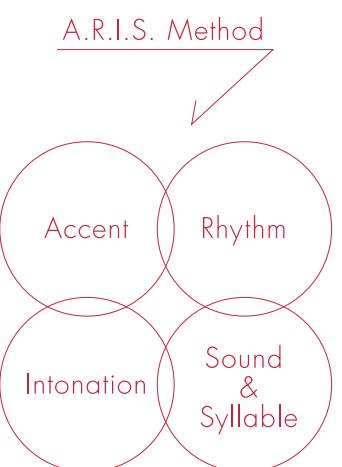
「成長期」にある脳は、たとえ何語であっても、その音素を吸収し、習得する能力を持っています。この時期に、日本語には存在しない英語の「音」を脳にインプットしてしまうこと。それがA.R.I.S.メソッドの基本的な考え方です。

A.R.I.S.メソッドは、英語に特有の **Accent** (アクセント)、**Rhythm** (リズム)、**Intonation** (抑揚、音調)、**Sound & Syllable** (音素と音節) にフォーカスをあて、独自に開発したプログラムで、ママとのふれあいの中で、自然に赤ちゃんが「英語耳」を養っていくことができるメソッドです。

絶対音感が大人になっても失われるものでないのと同じように、赤ちゃんの脳にしっかりと記憶された R や L や V や Ph の音素は、一生の財産としてお子さんの脳の引き出しにきちんと整理されてしまい込まれます。いつかお子さんが外国語として「英語」と再会したとき、その引き出しを開けて英語の音を使えばいいだけのことなのです。

A.R.I.S.メソッドは、人生の最初の限られた期間にだけ存在する魔法の力を、一生の宝物に変えるお手伝いです。聞き取りは言語習得の基礎。学校に入ってからの英語学習にも力を発揮するでしょう。

赤ちゃんだけが持っている魔法をつかまえ、
一生の宝物に変える
—それが A.R.I.S. メソッドです。



TOP INTERVIEW

A.R.I.S. メソッド シニアアドバイザー

ブライアン・ウォーカー

Brian Walker, MA, CCC-SLP

言語療法士(米国言語スピーチ&ヒヤリング協会認定)

12年間、スピーチや言語認識能力に関する、器官・非器官神経障害の診断や治療に携わる。バイリンガル(二国語併用)と言語発達の関係やその影響に注目し、これまで4カ国に在住し就労。2004年から日本在住。



本人(赤ちゃん)がまったく無自覚のうちに「英語耳」の発育を手伝う A.R.I.S. メソッドは、英語教育の「超・裏ワザ」という感がなくもない。しかし、赤ちゃんの時に二ヵ国語分の音を脳にインプットしてしまうこのアプローチは、実は非常にロジカル。画期的なこのメソッドについて、A.R.I.S. メソッド主任講師・中嶋三十津が、同メソッド開発シニア・アドバイザーのブライアン・ウォーカー氏に聞いた。

中嶋：そもそも「英語を聞き取る耳」って何なんでしょうか？

ウォーカー：僕が考える日本人にとっての「英語を聞き取る耳」の定義は、日本語には存在しなくて英語に存在する「音素^{※1}」や「シラブル^{※2}」を聞き分ける能力のことです。赤ちゃんは、生後数日間のあいだに、泣き声が、食べものや安心をもたらしてくれるこどもたちをすっかり学習し、コミュニケーションの第一ステージに入ります。新生児は、自分の身の回りの「重要な」音も聞き分けるようになります。それはたとえば、お母さんやお父さんの声です。そして成長と共に、赤ちゃんは「音素^{※1}」や「シラブル^{※2}」を聞き分けるようになり、それを積み木のように組み合わせることによって、ことば(言語)を構成することを学びます。おおよそ生後6ヵ月頃までは、赤ちゃんは母語の基本的な音声認識はできていると考えられています。

※1「音素」= 言語学における音声の最小単位のこと。

※2「シラブル」= 音節。音素(母音、子音)の組合せ。

中嶋：聞き取る「耳」が完成すれば、「発音」もネイティブ並みのものになるということでしょうか？

ウォーカー：「耳」と「発声」は当然、密接に関係しています。発声のメカニズムである顎、唇、舌、声

日本人はLとRの発音がごちや混ぜ、
なんていう時代はもう終わりです(笑)

帯などが成長し、それらに指示を与える脳が発育するにつれ、人は自分の音声をコントロールすることができるようになります。それまでに聞いて記憶した音を发声するのは、ごく自然のことですね。

中嶋：年齢が上がると、英語のヒアリングが難しくなるのは、なぜなのでしょうか？

ウォーカー：生まれてからの初めの2、3年間が、その人の一生の「ことば」のカギとなる決定的な時期であるという研究結果が、近年、数多く発表されています。この時期「成長期」にある脳は、どんな種類の言語でも吸収し、習得してしまう能力を持っているのです。一方、生後1年以降からは、自分には必要ない、つまり母語には含まれていない音素を聞き分ける能力を排除するようになります。年齢が上がってから言語習得が難しくなる要因のひとつですね。日本人が“L”と“R”を聞き分けられないというのは、その典型的な例なのです。

中嶋：毎日の子育ての中に A.R.I.S. メソッドを取り入れる理想的な環境とは、どんなものでしょうか？

ウォーカー：赤ちゃんの脳がもっとも敏感に反応するのは、自分にとって大切だと認識している声に対して—つまり、ママやパパの声なんです。ですから、リラックスした気持ちいい環境を作つてあげて、そのときに A.R.I.S. メソッドでコーチする英語の音素を、シャワーのように赤ちゃんに浴びさせてあげてほしいんです。たとえば、マッサージをしながら、抱っこしてあやしながら、などというのは理想的です。このように、ママが落ち着いて赤ちゃんと対話できる時間を利用して、英語の音素を聞かせてあげる。そうすれば、赤ちゃんの脳はスポンジのようにそれを吸収していきますよ。



聞き手 中嶋 三十津

(株)アリス・インスティテュート 代表取締役
A.R.I.S. メソッド主任講師

神奈川県横浜市出身。空港乗務員(全日空、オランダ航空)、米国海軍司令官秘書などを経験後、米国留学。ロードアイランド州立大学(社会学)卒業、インターンシップ制度で名高いドレクセル大学院経営学修士課程修了。97年に日本で数少ない海外教育機関(特に米国大学)の調査を行つアリス・インスティテュートを設立。海外大学、大学関係者や研究者のネットワークが広い。